《書評》

『日本近世史を見通す1 列島の平和と統合：近世前期』

牧原成征*・村和明**編、谷徹也***ほか著、吉川弘文館、2023年

木村俊哉†

近年、日本近世史を巡る議論は目まぐるしく進展している。政治史・社会史・経済史・対外関係史など、各分野において高度な実証的研究が積み重なっているといえよう。他方、研究の個別分散化という現状もまた事実である。本書はそのような課題を乗り越えるため、国際交易やキリスト教政策、幕藩体制の成熟や公武関係、北方や琉球などにも注目し、織豊政権から徳川家綱政治までの通史的叙述をしている。

以下、目次を掲げたい。

プロローグ 現代から見る近世の幕開け 牧原成征

第1章 世界のなかの近世日本 牧原成征

第2章 「豊臣の平和」と壬辰戦争 谷徹也

コラムⅠ 天下人の装束 寺嶋一根

第3章 幕藩政治の確立 三宅正浩

コラムⅡ 明暦の大火 岩本馨

第4章 近世朝廷と統一政権 村和明

第5章 島原の乱と禁教政策の転換 木村直樹

第6章 琉球に及んだ海禁 木土博成

第7章 列島北方の「近世」 上田哲司

エピローグ 泰平のなかでの転換へ 村和明

本書は、各章で執筆者が異なる論集形式となっているため、それぞれの内容を要約しつつ、適宜コメントを加えていこう。なお、各執筆者の名前は敬称略とした。

プロローグ（牧原成征）では、近世史研究の軌跡を辿りつつ、現代において近世史を学ぶことの意義に触れ、本書の内容全体を紹介している。現代社会は情報通信技術の急激な発展に伴い、グロー

* 東京大学大学院人文社会系研究科教授

** 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

*** 立命館大学文学部准教授

† 國學院大學大学院博士後期課程

k.shunya1560@gmail.com

バル化が進展しつつある。歴史学においても、タテにつながる文化・伝統の探究から、ヨコにつながる新技術やグローバル市場の展開が注目されるようになってきた。本書は、このようなグローバル・ヒストリーの潮流を踏まえ、どのような世界史的環境のなかで、いかなるプロセスやメカニズムを経て「平和」と「統合」が定着したのかを焦点に据える。

第1章（牧原成征）は、世界史との関わりの中で、近世日本について検討を加えた章である。特に、中世以来の肥前国平戸に着目し、倭寇や宣教師の来日など、地域間交流の様相を描く。九州・西国では生業を交易に依存しており、自力救済の中世社会においては海賊行為と不可分な関係にあった。他方、商人の広域的な往来や領民の平和を保障できる強力な権力を求める機運も高まりつつあり、これを天下人登場の背景として位置づける。織田信長が諸勢力からの礼物を財政の軸にしていたのに対し、豊臣秀吉は国替と検地、直轄領の拡大によって莫大な富を得ていたと対比、秀吉の登場は、在方から集まった莫大な富を、換金・流通・貯蔵するシステムの構築をもたらし、一大交易ブームを巻き起こしたと主張する。他方、江戸幕府は国際商業・交流ブームから距離をとって国内統制を優先し、奢侈禁令や「かぶき者」取り締まりなどの身分統制令を打ち出したと見通している。ローカルな条件とグローバルな条件を浮き彫りにし、近世日本の秩序形成過程を丁寧に描いた章といえよう。なお、秀吉の直轄領については、かつて想定されたほど莫大なものではなく、直臣層からの蔵米納入も停滞していた事実が明らかにされている（谷, 2014）。豊臣政権の財政構造や富の循環については検討の余地があるといえよう。

第2章（谷徹也）は、豊臣秀吉の大陸侵攻（壬辰戦争）について、国内の統一過程と関連づけて検討した章である。交渉や服属過程、兵糧政策といった諸要素から国内統一戦争との類似点を見出し、「豊臣の平和」の内実や矛盾がもっとも顕在化し、挫折した場面として壬辰戦争を位置づけている。また、大陸侵攻の要因として、秀吉自身の不朽の名誉の樹立とその背景にある唐物への憧憬を指摘している。秀吉は「仁政」を理念として掲げるものの、実態は暴力による圧政や破壊の繰り返しであり、「豊臣の平和」と大きく乖離したものであった。このような挫折を経て、諸大名は民衆と向き合う必要性を学び、民政に専念するようになったと結論づける。国内外の政治過程と絡めた上で、秀吉による政策の理念と実態の乖離を見事浮き彫りにした章である。また、秀吉の意思が当初より貫徹されたわけではなく、時々状況に応じて試行錯誤を繰り返していたという指摘も、今後の豊臣政権論を深めていく上で極めて重要といえよう。だが、大陸侵攻の主要因を秀吉自身の名誉樹立説に求めるのはどうだろう。本章が指摘するように、唐物への憧憬が秀吉個人だけでなく、国内全体にあったことは首肯できる。他方、石田三成は「日本六十六州で十分である。どうしてわざわざ、異国でせっぱつまった兵を用いなくてはならないのか」（『看羊録』）と述べている。この点からは、唐入りを果たさずとも、国内統一だけで十分名誉とする考えも存在したといえる。憧憬から征服にストレートに結びつくのだろうか。名誉樹立による承認欲求説は、やはり秀吉個人の性格的問題に帰結してしまうのではないかという疑問が残った。

第3章（三宅正浩）は、家光・家綱政権期における幕府や藩、武家社会の変化を考察した章である。従来、文治政治への転換として捉えられてきた殉死の禁や証人制について、家光・家綱政権期までの一過性の現象として捉えるべきと主張する。幕府も藩も「忠孝」「御為」という規範を広め、主従観念を確立させようと専念、全国の藩は「外聞（世上の聞こえ）」を意識し、横並びを志向する同調的な行動をとるようになり、武家社会の均質化が進展したと見通す。戦国以来の武勲を有する武士が減少しつつある中、「代々」の論理が強調されていく過程に着目し、親類大名集団の後見によ

る幼少当主の常態化を指摘、その背景に、徳川将軍家を軸とした縁戚関係の広がりを読み取っている。武家の意識や規範がいかにして形成・共有されたのかを明確化した本章は、近世中・後期への連続性をも視野に含めた意欲的な論稿といえよう。縁戚関係の広がりの中で、徳川家康を幕藩領主共通の祖として意識させるようになったという主張にも首肯できる。故に、その礎を築き上げた家康・秀忠による婚姻政策についても詳細な記述が欲しかった。本章が明らかにした意識や規範によって、幕藩政治機構の内実に踏み込んだ議論が更に増えることを期待したい。

第4章(村和明)は、近世朝廷における女性について、付与された知行に着目し、編成がいかに進んだかを分析した章である。知行と役の観点より、近世初期の朝廷は未だ自律的な集団ではなかったと評価、個々を束ねる天下人による女中への知行宛行ちぎょうあてがひに着目し、男性公家(武家伝奏など)よりも早く、職位に伴う知行(役知)が制度的に設定されていたと指摘する。最後に徳川和子(東福門院)について、贈答儀礼や非蔵人(給仕などの雑用役)の検討を通じて、禁裏の表・奥・幕府にまでまたがる彼女の影響力の大きさを明らかにしている。そうした将軍の代替役ともいえる和子の死に伴い、天皇・院を軸とした近世朝廷としての輪郭が明瞭になったと結論づける。女中の役知の制度化が、男性公家のそれよりも先行していたという指摘が大変興味深い。奥が表に先立つこのような現象について、天下人が朝廷運営を実質的に担った女中に期待していたからと考察するが、妥当だろう。役知以外の部分でも、かかる現象を見出すことができるのだろうか。また、武家女中(徳川将軍家や藩の奥女中)研究との対比も気になる議論だ。著者が提示した多様な論点を踏まえつつ、女性史の視点より描かれる今後の近世朝廷研究が楽しみである。

第5章(木村直樹)は、島原の乱(島原天草一揆)を切り口として、幕府による禁教政策の展開を論じた章である。はじめに一揆の経過を整理し、キリスト教弾圧と重税への抵抗という複合要因説を主張する。一揆勢は武士の系譜を持つ元領主が指導層として参戦した反面、幕府軍(九州大名連合軍)は戦場経験のない若い世代が指揮を執っていたと対比し、幕府軍が苦戦を強いられていた背景として指摘する。乱後の政策転換にも触れ、禁制が大名領域を越えて信者全体を対象にしていく過程を確認、家光政権期の対策としては、大目付・井上政重の個人的力量によるキリシタン捕縛という側面を重視する。家綱政権期になるとキリシタンの集団的な摘発事件(崩れ)が多発し、長崎奉行中心の統制機構が成熟していく。他方、統制機構の成熟と共に、画一的な禁制政策が実施されるようになり、次第に禁制そのものが形式化していくと展望している。幕藩体制の基本政策であるキリシタン禁制について、その展開を緻密に復元した章といえよう。禁制の意義や幕藩権力の方針についての再検討が必要になってくるように感じた。要旨とは離れるが、「島原の乱」という呼称は妥当だろうか。著者は、残存する史料が抑圧した側の武士中心であることから当該呼称を用いている。だが、文章中でも民衆側が「一揆勢」と称されている通り、近世一揆の典型例である。また、「乱」と表記することは、宗教戦争としての評価に偏ってしまうようにも見受けられる。一揆後半(島原)に併せて、前半の展開(天草)に注目するためにも、「島原・天草一揆」の呼称が適切ではないだろうか(大橋, 2008)。史料中の表記に厳密な姿勢である点には敬意を表したいが、先行研究が積み重ねてきた呼称の意義にも触れる必要があるだろう。

第6章(木土博成)は、野村元綱という薩摩藩士に焦点を当てつつ、近世における琉球の位置付けを考察した章である。従来まで「鎖国」「海禁」とされてきた一連の政策について、それぞれの呼称の弱点を踏まえつつ、ひとまず日本版の海禁政策として捉える。海禁に関する寛永11(1634)年の老中奉書(酒井忠世・酒井忠勝連署)を素材とし、二通りの解釈を紹介した上で、琉球が「異国」

として認識されていたか否かの問題提起を行っている。薩摩藩より派遣された在番奉行・野村元綱が、キリシタン禁制を徹底させる役割を担っていた点から、幕府は琉球をキリシタン対策における最重要拠点と見なしており、薩摩藩に取り締まりを徹底させたと指摘する。対して、野村が関与していた二つの案件（武具輸出に関する不祥事・生糸を巡る商人とのトラブル）の検討を通じて、人の往来や物資の出入りの統制については、幕府ではなく、あくまで薩摩藩主体で統御されていたと論じる。このような二つの側面を内包していることこそ、「附庸」かつ「異国」としての複雑な琉球の立場を反映しているが、海禁政策という観点においては、薩摩藩の「附庸」として海禁を遵守する側であったと結論づける。幕府・薩摩藩・琉球の三者それぞれの視点より考察し、史料の丁寧な解釈によって近世琉球を位置づけた章である。起点となる老中奉書は現代語訳で引用しており、複雑な議論を読者側にも分かりやすく解説している。第5章とも関わる論点でもあるが、在番奉行という、近世初期において個性が色濃く反映される職掌が、いかに統制機構として整備されるのか。ひいては薩摩・琉球間にどのような影響を与えるのか。近世中・後期への展望も気になった。

第7章（上田哲司）は、アイヌ・北方の「近世」化について論じた章である。最初に、15世紀半ばから17世紀中期までの約200年間を北方における近世前期として位置づける。北方交易の統括者であった安藤氏と、その麾下の蠣崎氏の動向に触れ、台頭の経緯や交易の様相などについて概観する。その上で、アイヌと蠣崎氏の関係は、従来想定されたような対立のみの関係ではなく、両者は経済的に共依存の関係であったと主張する。統一政権の登場により、蠣崎氏への交易権の安堵（＝安藤氏との主従関係の解消）がされた一方、アイヌに対する非分禁止を秀吉・家康両名共に打ち出しており、彼ら天下人が新たな支配者としてアイヌに臨んでいたと読み取っている。このような経緯を経て近世松前藩が誕生するが、中世以来の、アイヌが和人の政治権力の拠点まで交易に訪れるという城下交易制から、和人側がアイヌの領域へと赴く商場交易制へと変更、交易は和人側に有利であり、アイヌ社会を圧迫し続けた結果、シャクシャイン戦争が勃発したと指摘する。当該戦争を経て、アイヌと和人の領域に明確な線が引かれ、千島・カラフトも含めた蝦夷地全域を、幕藩制日本の支配が及ぶべき版図とする観念が浮上したと見通している。縁辺部の視点より、列島中央に登場した統一政権との関係を詳細に考察しており、興味深い論点が数多く提示されている。中でも、蠣崎氏とアイヌが経済的共依存の関係であったという指摘は鋭く、外交や交易の意義を再検討する重要な議論といえよう。

エピローグ（村和明）は、本書の締めくくりとして、第1巻（本書）・第2巻の時代（近世中期）をまたいで生きた天野長重と三井高利を紹介する。近世前期という時代は、その時代を生きた人々の膨大な記憶と経験が語り継がれることにより、次巻の時代へと引き続き、その基盤となったと結ぶ。

本書全体を通じて思うことは、各章の緻密さと視野の広さである。国際交易やキリスト教政策、幕藩関係、公武関係、北方や琉球の近世化など、グローバル化が進む現代社会に応じた近世史研究を見事に打ち出しているといえよう。二つのコラムも充実しており、天下人の装束や明暦の大火など、多くの読者が関心を寄せるテーマにも、最新研究の知見を提供している。研究の個別分散化が課題とされる現在、本書の刊行は大変喜ばしいことといえる。

他方、最後に一点だけ気になった点を指摘しておきたい。徳川家康の位置付けである。本書は政権ごとに章を設けるのではなく、多岐に渡る分野をそれぞれの執筆者が論じるという形式を取っ

ている。それによって実証性の高い各章が配されるが、近世前期という通史叙述に際しては、少なくとも徳川家康による幕府樹立過程は正面から取り上げる必要があったのではなかろうか。すでに数多く議論されてきた分野ではあるが、近世の国制を理解するのに際し、やはり豊臣政権から徳川幕府成立までの政治史（「関ヶ原合戦」「大坂の陣」「国奉行」など）にも触れて欲しかったというのが本音である。

以上、菲才を顧みずに愚見を書き連ねた。評者の能力不足から、その意義を十分に指摘できず、誤読もあるかと思うが、ご海容をお願いしたい。本書が「日本近世史を見通す」という課題に十分応えている好著であることには間違いのないため、多くの読者の手に渡ることを願っている。

参考文献

大橋幸泰（2008）『検証島原天草一揆』吉川弘文館。

谷徹也（2014）「豊臣政権の算用体制」『史学雑誌』123巻12号（2014年12月），2125-2148頁。